

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

ジャック・ガロのリュート曲《嬰へ短調の拍子付けのないプレリュード》
：その解読と分析に基づく演奏解釈

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水戸, 茂雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/2000041

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ジャック・ガロのリユート曲
《嬰へ短調の拍子付けのないプレリユード》
～その解読と分析に基づく演奏解釈～

水 戸 茂 雄

ジャック・ガロのリユート曲《嬰へ短調の拍子付けのないプレリュード》 ～その解読と分析に基づく演奏解釈～

水戸茂雄

リユートは様々な種類が存在するが、およそルネサンス・リユートとバロック・リユートに分類される。この二つの違いは音楽の様式、以下に示した図1と図2の調弦⁽¹⁾そして演奏技法によるものである。

1600年頃、フランスで新しいリユートの調弦が試みられるようになり、多くのリユート音楽家によって種々の調弦によるリユート音楽がタブラチュア譜に書かれた。そして最終的には1コースから6コースがファ、レ、ラ、ファ、レ、ラのD調弦に確立された。それに並行して新しい様式が形成されていった。その一つが、六線上に音符が散りばめられた、拍子付けのないタブラチュア譜による、いわゆる「拍子付けのないプレリュード」である。

図1 a 7コースリユート

1° 2° 3° 4° 5° 6° 7°

ユニゾン オクターブ

図1 ルネサンス・リユートの調弦

例3 1コース 2コース 3コース 4コース 5コース 6コース 7コース 8コース 9コース 10コース 11コース 12コース 13コース 14コース

複弦ユニゾン(同音程)

図2 バロック・リユートの調弦

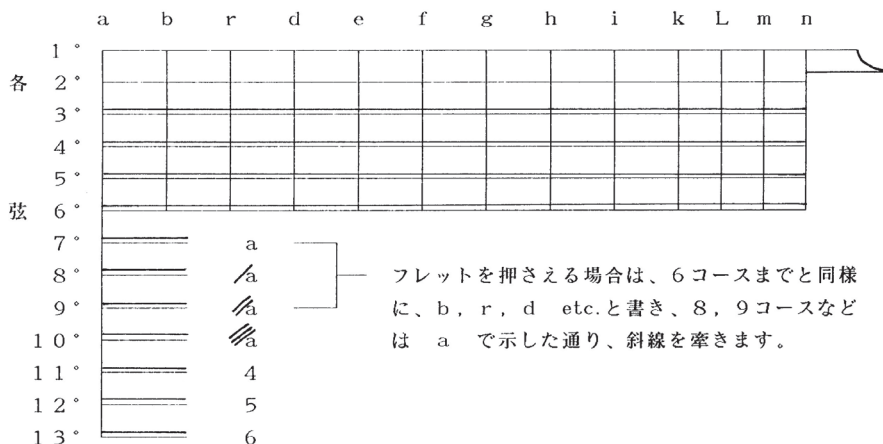


図3 タブラチュア譜の音を表すアルファベットのリュートの弦とフレットの位置

◇指の記号

左手の記号は、ギター楽譜に於ける運指表示と同様に人差し指から 1, 2, 3, 4 と数字で記します。

右手は、親指から |, ·, ···, ∴ という記号で記します。

図5

	親指	人差し指	中指	薬指	小指
右手		·	··	···	∴
左手	∴	1	2	3	4

図4 指の記号

はじめに

拍子付けのないプレリユードは、17世紀のフランスのバロック・リュート音楽において最も重要な楽曲に位置づけられる。譜面には旗のない音が羅列し、それを演奏者が「良い趣味⁽²⁾」を持って演奏するという楽曲である。この音楽様式はクラヴサン(チェンバロ)に大きな影響を及ぼし、多くのクラヴサン音楽家が「拍子付けのないプレリユード⁽³⁾」を作曲した。

17世紀フランスで活躍したリュート音楽家ジャック・ガロ Jacques Gallot (?-1685?) は当時のリュート音楽家の中でも傑出した人物で、優れた作品を多く残している。

ガロの作品にはライプツィヒ図書館にタブラチュアによる手稿譜が所蔵されているが、同じ資料中の手稿譜でも判読できるものと判読困難なものがある⁽⁴⁾。譜例1と2に実例として示すが、譜例1の《プレリユードニ短調》は整然と記譜され読みやすい。これに対して譜例2《プレリユード嬰へ短調》は速書きされて乱筆が目立つ。手稿譜には六線上にアルファベットが書かれている

が、即興で思い浮かんだ旋律を書き留めたためであろうか、速筆乱雑でインクの滲みや擦れがあり、判読が困難な部分が随所に見られる。《嬰へ短調》のタブラチュアを解説し、再現を試みるにあたって以下の工程に分けて考察していく。

工程1. 譜例2のタブラチュアのアルファベットや記号を解説し、新たにタブラチュア譜を作成する

工程2. タブラチュア譜から五線譜に直す

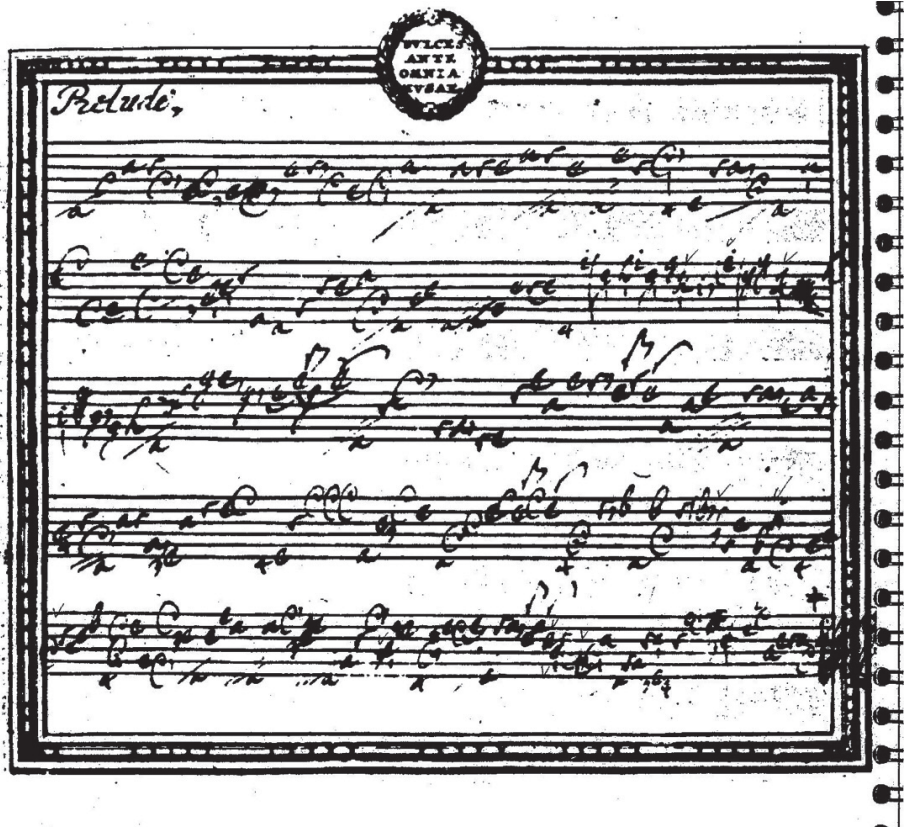
工程3. 和声分析と声部分けを行う

工程4. フレーズングとパターン分け

工程5. 当時の演奏様式に沿った装飾やノート・イネガルを使用し、筆者の解釈を通して、ガロ作曲嬰へ短調の拍子付けないプレリュードの再現演奏を試みる

The image shows a page of handwritten musical notation, likely a tablature for a lute or similar stringed instrument. The notation is written on a five-line staff and consists of various letters (a, b, c, d, e, f, g, h, k) and symbols (accents, slurs, and other markings) placed on and between the lines. The word "Preludio" is written at the top left of the staff. The notation is dense and somewhat messy, reflecting the "速筆乱雑" (hasty and messy) nature mentioned in the text. The page is framed by a decorative border, and there is a circular seal or stamp at the top center.

譜例1 プレリュードニ短調 自筆譜



譜例2 プレリュード嬰へ短調 自筆譜

工程1. 譜例2のタブラチュアのアルファベットや記号を解読し、新たにタブラチュア譜を作成する

タブラチュア譜から五線譜へ変換するには図1と図2の調弦に従って音を判読する。

今回は1600年代フランスのバロック・リュートなので図2の調弦に従って行う。タブラチュア譜の音を表すアルファベットのリュートの弦とフレットの位置は図3に示す⁽⁵⁾。タブラチュア譜に書かれた左右の指の数字と記号は図4に示す。譜例2の上部中央の円形の中のDULCES ANTEOMINIA MUSAEという文字は「ミューズの甘い予感」という意味である⁽⁶⁾。また、タブラチュア譜の左上にはPreludeという文字が書いてある。楽譜本体については六線上に書かれたアルファベットを一つずつ読み取っていくと、譜例3のようになる。最後の部分は判読不能だが、終止するための主和音を補足した。

Prélude fa dièse mineur(F-Sharp Minor)

Jacques Gallot(?-1699以前)

譜例3 タブラチュア譜の清書

工程2. タブラチュア譜から五線譜に直す

譜例3のタブラチュア譜の各アルファベットを図2と図3に沿って五線譜に当てはめて行く。ここでは譜例4のように一段譜で示す。

The image shows a handwritten musical score for guitar, labeled as Example 4. It consists of eight staves of music, all on a single system. The key signature is D major (two sharps: F# and C#) and the time signature is 8/8. The notation includes open circles for fretless notes and circles with numbers for fretted notes. Some notes are beamed together in eighth notes. The score is written on a single system of eight staves.

譜例4 五線一段譜

工程3. 和声の分析と声部分けを行う

五線譜に直した楽譜を和声分析すると譜例5となる⁽⁷⁾。次にタブラチュア譜に書かれた右手の記号を読み取っていくと、譜例6のように親指の記号で示されたアルファベットの部位が中声部のラインを作っているのが分かる。中声部を黒音符にしてスラー記号で各声部を繋いでいくと譜例7のようになる。

譜例5 和声分析




譜例6 親指の記号で示されたアルファベットの部位



譜例7 浮かび上がってきた中声部のライン（黒音符）

工程4. フレージングとパターン分け

和声分析(譜例5)と声部分け(譜例7)の次にフレージングを行う。タブラチュア譜に  の音符が譜例8で示したア、イ、ウ、エの4箇所存在する。ここはガロがフレーズの目安として書いたと思われる。次に楽曲の始まりから⑦までのパートでは①、②、③、④、⑤の箇所ではフレージング、同様にイからウでは⑥、⑦でフレージング、ウからエで⑧、⑨、⑩、⑪、⑫でフレージング、エから楽曲の最後で⑬、⑭のフレージングを行う。



譜例8 フレージング

各パートのフレージングが出来たので、次にさらに細かくパターンに分ける。

譜例9のようにa、b、c、d、e、f、g、h、i、j、k、l、mに分けた。

譜例9 パターン分け

次にフランスのバロック・リュートの奏法として使用されるスティル・ブリゼが、譜例10のあ、い、う、え、お、か、き、くの箇所に書かれている⁸⁾。ここは和音として演奏すると同時に、多声部として音を保持しながら演奏しなければならない。

Handwritten musical score for 'あ〜くのスティル・ブリゼの箇所' (Example 10). The score consists of eight staves of music in treble clef with a key signature of two sharps (F# and C#). The music is divided into measures by vertical bar lines. Various measures are annotated with circled numbers (1-14) and boxed letters (a, b, c, d, e, f, g, h, i, j, k, l, m, n). Some measures contain complex rhythmic patterns, including triplets and sixteenth notes. The notation includes stems, beams, and various note heads (half, quarter, eighth, sixteenth notes).

譜例10 あ〜くのスティル・ブリゼの箇所

工程5. 当時の演奏様式に沿った装飾やノート・イネガルを使用し、筆者の解釈を通して J.ガロ作曲 嬰へ短調の拍子付けのないプレリュードの再現演奏を試みる

譜例2の自筆譜で、ところどころアルファベットの右横に付けられた ' はリュート・タブラチュア譜におけるアポジャトゥーラの記号である⁽⁹⁾。演奏にあたり作曲者が付けた箇所の装飾を全て忠実に演奏する必要はなく、下からのアポジャトゥーラや上からのアポジャトゥーラ、ノート・イネガル⁽¹⁰⁾等は演奏者自身の良い趣味とセンスに委ねられる。

以上、記述したことを踏まえて筆者が実演したサイトを掲載しておく⁽¹¹⁾。

Pièces in F-Sharp Minor(Excerpts):Prélude

<https://youtu.be/-9ArmH3Jm5Y>

おわりに

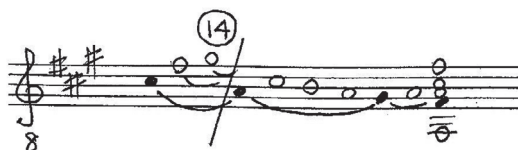
17世紀のフランスに於けるリュート調弦の転換は、音楽様式や演奏様式を大きく変えた。ルネサンス・リュートに於ける4度音程の調弦と異なり、3度音程のバロック・リュートの調弦は、音程が狭い故に異弦間で2度音程を容易に保持することができる。例えば譜例1の3段目の終わりから4段目にかけての下行スケールは、2度音程を響かせながら進行している。複数の鐘が鳴るような効果を出す「カンパネラ奏法」である。譜例2では①、②、⑥、⑭、ウなどで和音を響かせる箇所や、狭い音程で2声が進行する箇所など、2度音程の不協和音が心地よく響く。タブラチュア譜を解読する際に、この効果の見落としがないか留意する必要がある。さらに、フランス音楽を演奏する時に感じることは、フランス語の言葉の響きからフランスのバロック・リュート音楽が生まれているということである。この点については、これからさらに事例を研究していく中で、論じていきたい。

(本学講師=特別実技科目 リュート担当)

注：

- (1) 図1ルネサンス・リュートの調弦は1コース(一番高い音の弦)から6コースまでの開放弦がソ、レ、ラ、ファ、ド、ソと調弦される。1コースは単弦、2コースからはユニゾンまたはオクターブで複弦となる。
図2バロック・リュートの調弦は1コースから6コースまでの開放弦がファ、レ、ラ、ファ、レ、ラと調弦される。1コースと2コースが単弦、3コースから5コースまでユニゾンで複弦、6コースはユニゾンまたはオクターブで複弦、7コースからはオクターブで複弦となる。
- (2) 17世紀のフランスにおいて、貴族のサロンで才媛や文化人が集い、礼儀作法、文学、哲学や音楽などが洗練され極められたプレオジテPréositéという貴族趣味。この中でフランス・バロック・リュート音楽は開花した。
- (3) 拍子付けのないプレリュードPrélude non mesuré 17世紀のフランスでリュート音楽たちによって、音符が羅列された拍子付けのない自由な形式のプレリュードが作曲された。旗のあるもの、ないものが見られる。その後ドイツ圏の国々に導入され様々な音楽家たちによって作曲された。
- (4) ライプツィヒ図書館 Leipzig.Musikbibl. Der Stadt.Mus.ms. II 6.14

- (5) 図3タブラチュア譜の音を表すアルファベットのリュートの弦とフレットの位置
譜例3の冒頭部分を例にあげると、/aは第8コースの開放弦なので#ファ、次のdは第4コース第3フレットで#ソ、次のaは第3コース解放弦でラと置き換えることができる。
- (6) DULCE ANTEOMNIA MUSAE 自筆譜に書かれた不明瞭なこれらの文字の解説を
本学声楽講師 エルマンノ・アリエンティ Ermanno Arientti氏にご協力頂いた。
- (7) 和声分析 本学付属民族音楽研究所チェンバロ講師 坂 由里氏にご協力頂いた。
- (8) スティル・ブリゼ style brisé 「分散様式」の意。異なる声部間に和音を分散させた音形を指す。 柴田南雄編 『ニューグローヴ世界音楽大辞典』(東京：講談社) 9, 227.
- (9) アボジヤトゥーラ appoggiatura 「倚音」のこと。旋律的な装飾の一つで、普通は和声音に対して一音上方、あるいは下方の音を指す。 柴田南雄 編 『ニューグローヴ世界音楽大辞典』(東京：講談社) 1, 124.
- (10) ノート・イネガル notes inégales 均等な音価で書かれた音符を不均等で演奏する事。
不等化の程度は(すなわち2つの音符間の長短の割合)はわずかに感じられるものから複付点音符まで、曲の性格や演奏者の趣味によって変えることができた。 柴田南雄 編 『ニューグローヴ世界音楽大辞典』(東京：講談社) 12, 380-384.
- (11) 筆者は⑭以降の最後のフレーズを譜例11のように中声部を黒音符#ドからの繋がりとして、#ド-#ミ-#ソ-#ファよりも#ド-ラ-#ソ-#ファと弾く方が曲の流れとして自然と感ずるのでCDではこのように演奏した。



譜例11 最後のフレーズ

参考文献

Veilhan, Jean-Claude

- 1986 フランス・バロック音楽 解釈と演奏原理 J.C.ヴェイヤン 著 細野孝興 訳 パリ・(A.ルデュック社) PP.20-55

Frotscher, Gotthold

- 1981 バロック音楽の演奏習慣—バロック音楽の楽典— 山田貢 訳 (シンフォニア) PP.114-137

フェレデリック ノイマン

- 1992 正しい装飾音楽法 為本章子 訳 (音楽の友社)

小川 伊作

- 1994 17世紀フランス・リュート音楽研究 (2) —ジャック・ガロのリュート曲集およびその緒言をめぐって— 大分県立芸術文化短期大学 第32巻

ロジェ ジュベール

- 2010 十七世紀フランス文学入門 原田 佳彦 訳 (白水社)

玉田 敦子

- 2012 「啓蒙」と「熱狂」 フランスにおける「趣味判断」の由来と近代性 中部大学人文学部研究論集第29号. Pdf

磯山 雅

- 1990 バロック音楽 豊かなる生のドラマ (NHKブックス) PP.88-89

水戸 茂雄

- 1992 ルネサンス・リュート教則本 N&S古楽研究会 P.7, 16
1993 バロック・リュート教則本上巻 N&S古楽研究会 P.12, 16, PP.22-31
1993 バロック・リュート教則本下巻 N&S古楽研究会 PP.10-13

楽譜

ライプツィヒ図書館：Leipzig,Musikbibl. Der Stadt.Mus.ms. II 6.14

Manuscrt Vaudry de Saizenay

1980 Bibliothèque municipale, Besançon. 279. 152 et 279. 153 1699. Minkoff reprint

Manuscrit Milleran

1980 Tablature de Luth Française (BN, F-Pn ms Rés. 823). Minkoff reprint

事典

佐野 光司；

1994 「アボッジャトゥーラ」 柴田南雄 編 『ニューグローヴ世界音楽大辞典』（東京：講談社）1, 124.

関根 敏子；

1994 「ジャック, ガロ」 柴田南雄 編 『ニューグローヴ世界音楽大辞典』（東京：講談社）1, 210.

関根 敏子；

1994 「スティル・プリゼ」 柴田南雄 編 『ニューグローヴ世界音楽大辞典』（東京：講談社）9, 227.

関根 敏子；

1996 「ノート・イネガル」 柴田南雄 編 『ニューグローヴ世界音楽大辞典』（東京：講談社）12, 380-384.